

ヨーロッパにおける日蓮宗の開教事情について——イタリア

イタリア共和国 ピエモンテ州 モンフェラート地方

チエレゼート市 弘法山蓮光寺

タラビーニ勝亮

この二十年間、日蓮宗は海外布教非常に力を入れ、海外での寺院も増加してきました。現在、海外に置ける日蓮宗寺院は三十ヶ寺になっています。しかし、日蓮宗の海外布教の歴史は最近始まった事ではなく、日蓮聖人の十三回忌の後、六老僧の一人日持上人は北日本各地を布教していくつかの寺院を開山した後、シベリアや中国に向いました。これは日蓮宗だけではなく、日本仏教会全体で初めての海外布教となりました。後に日蓮宗に於ける海外布教史について述べようと思いますが、その前に、現時点での海外に於ける日蓮宗の寺院はどのようになっているのでしょうか？

私は、最近出来た海外寺院の一つ、イタリアや南欧州の国々を担当している北イタリアにある小さな寺院「蓮光寺」の主任を務めております。法華経・お釈迦様や日蓮聖人の教えと日蓮宗の伝統を海外で布教・指南するための日蓮宗寺院は現在時点では、全部で三十一ヶ寺あります。その寺院のある地域はハワイ諸島、北南米、東南アジア、東アジア、南アジアと欧州ですが、その内訳は左記のとおりです。

ハワイ諸島	5ヶ寺
北米 ・アメリカ合衆国 (カリフォルニア 3ヶ寺、オレゴン州 1ヶ寺、ワシントン州 2ヶ寺、ネヴァダ州 1ヶ寺、テキサス州 1ヶ寺、イリノイズ州 1ヶ寺、ニューヨーク 1ヶ寺、ボストン 1ヶ寺、ケンタッキー州 1ヶ寺、南カロライーナ州 1ヶ寺) ・カナダ	14ヶ寺 13ヶ寺 1ヶ寺
南米 (ブラジル)	2ヶ寺
欧州 (英国、ドイツ、イタリア)	3ヶ寺
アジア (インド 2ヶ寺、スリランカ 1ヶ寺、マレーシア 2ヶ寺、シンガポール 1ヶ寺、インドネシア 1ヶ寺、韓国 1ヶ寺)	8ヶ寺
総合計：	31ヶ寺

古代地中海文化と仏教の初期接点

仏教の世界的な布教や伝道は、最初古代インドの大陸に全国的に広がり、そして北方に伝播していきました。インド全大陸の大王であったマウリヤ王朝のアショーカ王（三〇四～二三二BC）は、仏教徒となり、臣民のための幸福に貢献し、その他の国との関係などを仏教の基礎に基づいて努めてきました。彼はまた、仏教を弘めるため人を助ける事に尽力し、「アショーカ王の摩崖碑文」と呼ばれている三十三の石柱を建てました。これらの摩崖碑文では、彼はダルマや道徳を教え、いくつかの布告の中には、伝道や布教の範囲を指摘した箇所もあります。

アショーカ王は仏教を弘めるために、遠くの国々に大使（多くの場合は僧侶でした）を派遣してきました。このアショカ王の摩崖碑文により、仏教はインド全大陸、そして北方、北西方と北東方に広がっただけではなく、ヨーロッパや地中海の文化との接触を行った事を知ることができます。摩崖碑文第十三では、左記の通り書かれています。

今では、神々の最愛士の最高の征服は法（ダルマ）によるものである。その「ダルマの征服」によって、勝利を受賞される事が出来ました。そして六百ヨージヤナ（由旬）離れても、ギリシャのアンチアンティオコス王の治世の国にしても、以遠のプトレマイオス、アンティゴノス、マーガスとアレクサンダールールという四人の王様達の治世の国々にしても、南方のチョラス族やパンディヤス族とタンラバルニ族の場合も同様であります。（筆者訳）

その六〇〇ヨージヤナ（由旬）という距離は約六五〇〇キロであり、その測定は中央インドからギリシャ迄の距離を計算されたものでありました。アンティオコス王のセレウコス帝国がシリアからバクトリアに広がっていました。その帝国内にて、初めて仏像が誕生し、全世界の仏教文化や美術に採用されました。アンティオコス王はアショーカ王の隣人でした。プトレマイオス王はエジプトのアレクサンドリアを支配した人です。アンティゴノス王やマーガス王の二人は（ギリシャの）マケドニア王国の王達です。アレキサンダー王はエピラス王国（現在バルカン諸国）のシチリア人とマケドニア人の混血の人でした。チョラス族やパンディヤス族は南インド（アショカ大王の帝国外）であり、タンラバルニはスリランカの古代名でありました。

ローマ帝国の時代には、ローマと仏教の世界との間の相互作用の例は、古代の作家によって文書化されています。ローマの歴史的記録によると、紀元十三年には、インドのパンディオン王（Pandyā）はローマ皇帝のアウグストゥスの所へ大使を派遣したことが知られています。その使者はギリシャ語の外交手紙を携え旅行しました。そして使者と共に旅をした一人はインドの出家者（Sramana）でした。その出来事は大変印象的で、当時のギリシャ地理学者ストラボンやローマ領事・歴史家のルシウスカシアステイオの報告によると「彼の墓を立て、その碑文には『ΖΑΡΜΑΝΟΧΗΓΑΣ ΙΝΔΟΣ ΑΠΟ ΒΑΡΤΟΣΗΣ』（「インド・バリガーザ国出身の沙門大師）」と記され、ブルタ

ルコスの時代でもその碑文が見られたと言う。」こんな碑文には、インドからの宗教者は古代地中海の諸国に訪問したことが明確に示されています。

古代インドでは、ギリシヤ人とローマ人による紅海の開放後に発生した多くの国と強い海上貿易を確立していました。紀元最初の二世紀間、皇帝アウグストゥスの時代（紀元前六三年～紀元十四年）に帝国による確立された比較的平和な時期には、インド西部とローマ間の貿易が増加され、その重要な商業関係は古代インド西部とローマとの間で存在していました。

ローマの文献に記録されているように、ローマはインドのトラ、ヒョウ、サイ、ゾウ、猿、クジャクや蛇を輸入していました。また、「ペリプルス」の記録によると、ローマの女性はインド産の真珠を身に付け、そしてインドのハーブ、香辛料、コショウ、ライシーム、コスタス、ゴマ油や食品用の砂糖を食料品として指定していました。衣料品には、インド製の綿や藍も色として使用され、そしてローマ帝国はインド産のライム、桃、そして薬用その他の果物を輸入していました。結果的には、古代インドの西部にはローマの金が大量に流れました。

その古代インドやローマの間の顕著な貿易の背景には、ローマが当時のインドの仏教徒とヒンドゥー教徒が使用していた「ジャパマラー」（念珠、数珠）も輸入していました。初期の頃のキリスト教徒はその輸入されたマラーを選択していましたが、そのままの仏教風ではなく、キリスト教用にしたマラーを利用されるようになりました。サンスクリット語の「ジャパマラー」（実際には「数えるためのビーズ」と意味する）からラテン語の「ロザリウム」（ローズの木製ビーズの意味）に誤訳され、初期のキリスト教徒には、このロザリウムを採用して以来、地中海のキリスト教（特にカトリック教とギリシヤ正教）の宗教文化の不可欠な一部のものとなりました。

初代教会と仏教との振り合い

仏教に関する情報は、初期キリスト教の世界にも入っていたといえます。紀元二〇〇年頃は、初期キリスト教神学者であるアレクサンドリア市のクレメンスは「ボウッタ」(Boutta)の信者に関して初めて言及しました。クレメンスは自作品の「ストロマテイス」では、「古代、様々な国に光を流して、野蛮人のうちに栄えていた。その後ギリシヤに came ました。」というボウッタの哲学の起源を説明しています。その後は、「インドの『ジムノソフィースト』(裸の哲学者という古代ギリシヤ語のインドの苦行を課す僧侶という意味)も数多くおります。彼らの中には、二つのクラスがあり、一つはサルマナエ(Sarmanae、沙門)で、もう一つはバラモンと呼ばれている。そして、その中でも『ボウッタ』の戒律を守る人もいます。それはなぜならその『ボウッタ』が非凡な神聖のための、神の榮譽に上昇したというからであります。」と記しています。

その後、紀元一〇〇年頃、バルラーム(Baram)とヨザファト(Josaphat)の伝説を通して、仏陀の人生の物語は西洋のキリスト教行者の理想に影響を与えるようになりました。その物語はアトス山の僧侶エウテイミウス(Euthymius)によりグルジア語からギリシヤ語に翻訳され、その内容はインド出身の二人のキリスト教聖人の物語でありました。一人はキリスト教仙人のバルラームで、もう一人は改宗された王子のヨザファトの話でありました。この二人の物語は、古代インドの仏教僧アシュバゴシヤ(Asvaghosa、馬鳴)のサンスクリット語の釈尊伝、紀元二世紀「ブダチャリタ」に基づいたものであり、釈尊の出家のについて語ったものです。それが中央アジアから西方に渡り(ペルシアの)マニ教の釈尊伝の中の出家の話の解釈を通して出来たものとして最も可能性が高いと思われまます。そして、その物語は八世紀頃にイランのペレーヴィイ方言から翻訳されたアラビア語版のものがバグダッドのマニ教コミュニティに登場します。サンスクリット語の「Bodhisattva(菩薩)」という単語は、ウイグル語の

「Bothasaf (ボダサフ)」となり、後にアラビア語の「Yudhasaf (ユダサフ)」に変わり、ゲルジア語の「Iodasaph (イオダサフ)」とギリシャ語の「Iosaph (イオサフ)」となり、そして最終的にラテン語の「Iosaphat (ヨサファト)」に進化しました。その後、キリスト教ではヨザファトは聖人となりました。要するに、キリスト教の中では、この古伝を通して、お釈迦様がキリスト教の聖人に形質転換されました。

実は、イタリア南部ナポリ市にヨザファト聖人を捧げる小さな教会が二つあると聞いていますが、まだその教会が見つからず、訪問する事が出来ていません。もしこれが本当であれば、ヨザファト聖人を捧げる教会は実際にはお釈迦様に捧げる教会という事になります。また、このナポリの教会以外に、北イタリアのパルマ市の大聖堂の洗礼堂入り口の上にはヨザファトとバルラーム両方の彫刻が施された画像があります。それに対して言及することは興味深いものでしょう。そして、このヨザファトとバルラームの崇拜は未だにギリシャ正教にみられ、二人の饗宴日は毎年八月二十六日に祝われています。

ヨーロッパのキリスト教の宣教師や使者とアジアへの旅の歴史

古代ヨーロッパの歴史に於いて、仏教と最初の接触の後、西洋は中世時代以来、仏教との接触は見られません。しかし、ヨーロッパが再び仏教と接触したのが一二〇〇年代に始まり、インド、中国、東南アジア、チベット等に大使や宣教師を派遣しました。この時期、日本では宗祖日蓮聖人の時代でありました。その歴史の背景に於いて、多くの国際的な旅行者はアジアの方面へ出かけ、その旅行者はアジア諸国の景色、社会、政治、文化等を見聞して、目にしたものを欧州の政府やローマ法王に報告しました。その報告の中にはアジア各国の仏教信仰や伝統についても言及されています。

大モンゴル帝国皇帝に会見するため、ローマ法王イノセントは使者四名を派遣しました。最初の使者はイタリア人

のジョバーニ・ダ・ピアノ・デイ・カルピーニ (Giovanni da Piano dei Carpinu) というペルージャからのフランシスコ会の修道士・宣教師でした。彼は一二四三年大モンゴル帝国の朝廷に入り、その当時、崩御したばかりのオゴデイ・カアン (皇帝) の長男であるグユク (後に第三代モンゴル皇帝となりました) に受け入れられました。カルピーニ師の次はイタリア北部クレモナ出身ドミニコ会の修道士のニコラ・アシェリーノ・デイ・ロンバルディア (Nicola Ascelino di Lombardia) でした。彼は一二四五年に帝国のバイジュ・ノヤン將軍にも近づき、そして一二四九年には、第三の使者はローマ法王の使者だけでなく、フランス王のルイ九世の大使としても派遣されたドミニコ会の宣教師のアンドレ・デ・ロンジュモー (André de Longjumeau) であり、彼は第三皇帝となったグユク・カアンに受け入れられました。最後は、ローマからの大使、フランタースからフランシスコ会の修道士・宣教師のウイレムヴァン・ロイスブルーク (Willem van Ruysbroeck) で、一二五四年にモンケ・カアンに謁見され、その旅中、ロイスブルークはモンゴルや中央アジアの社会・地理・風俗・宗教・言語を旅日記として「東方諸国旅行記」を書き残しました。これら初期旅行者の後継は、有名なマルコ・ポーロであります。

ヴェネツィアの商人は一二七一年〜一二七五年の間に元朝廷に到着し、その後二十年間程滞在し、クビライ・カアンに接受されました。その後、スペインのイエズス会の宣教師フランシスコ・デ・ザビエルはポルトガル王ジョアン三世に命じられ、一五四二年インド・ゴアに派遣され、そして一五四五年には東南アジアのボルネオ島やムルク諸島 (マルク諸島やモルッカ諸島、香料諸島の事、現在インドネシア共和国内) を訪問しました。最後は一五四九年日本に入国し二年間滞在しました。

フランシスコ・ザビエルとイエズス会のキリスト教宣教師達の布教により多くの九州大名も含め十万人以上の信仰者をキリスト教に改宗させ、更にザビエルは仏教の教えと実践の詳細なレポートを西洋に遣わしました。そしてフランシスコ会の宣教師ジョヴァーニ・デイ・モンテコルヴィーノが一二九一年インドに入国し三年間滞在した後、一二

九四年中国に渡りました。そして一三〇八年モンテコルヴィーノはニコラス法王の任命に応じて、北京の初代大司教に任命されました。

イタリアイエズス会の司祭ミケレ・ルッジェリやマテオ・リッチとその他十二人の宣教師と共にアジアに向けて、ポルトガルからヨーロッパを出発しました。彼らは先ず一五七八年にゴアに到着し、一五八二年にマカオに入りました。中国へ大使を派遣するようローマ法王に依頼するためルッジェリ師は一五八八年十一月中国を出発して、ローマへ向いましたが彼はその目標を果たせずに、途中で死亡してしまいました。一世紀程後にイタリアイエズス会の司祭・宣教師のイポリト・デジデーリは一七一六年インドのゴア経由でチベットの古都ラサに到着しました。デジデーリはヨーロッパで初めてチベット語に長けた人であり、ラサにある三大仏教寺院の一つセラ寺に入りました。当僧院大学で暫く生活をしながら、デジデーリはその他の仏教僧侶と共に学習及び議論に参加しました。

十七世紀〜二十世紀のヨーロッパと仏教との関係

十七世紀に注目すべきは大勢の仏教徒がヨーロッパに渡り仏教の信仰や伝統を守りながら、生活を始めるようになった事です。一六三〇年チベット仏教の信者であったモンゴル人は南シベリアのヴォルガ地方の草原に入りカルミキヤ国を設立しました。現在、この地方はロシア連邦内のカルミキヤ共和国となり、ヨーロッパでは唯一の仏教国となっています。

当時、「ブツダ」、また「佛様の教え」、「ブツダダルマ」、「仏法」、「仏教」という用語をよく聞くようになったヨーロッパでは欧州の言語で表現をする必要があり一八二五年にフランスで「Bouddhisme」という言葉を初めて使うようになり、後にその新単語が英語に「Buddhism」、ドイツ語に「Buddhismus」、またイタリア語の「Buddismo」など各国の言葉に翻訳されました。

一八七〇年以來、近代ヨーロッパにおける仏教への関心は早期の頃、ドイツの哲学者のアーサー・ショーペンハウアー（一七八八年～一八六〇年）やフレドリヒ・ニーチェ（一八四四年～一九〇〇年）、そして密教やオカルトに深い興味を持つロシア神知学の学者ヘレナ・ブラヴァツキー（一八三一年～一八九一年）などのはヨーロッパ学界の間で周回していました。

十八世紀後半における中央ヨーロッパ大学のサンスクリット語の研究の到来と共に、仏教のテキストやその他の書物の利用が可能となり、仏教に関する議論が始まりました。一八四四年に著名なフランス人・東洋学者であったエウジェニス・ブルノーフ (Eugène Burnouf) は、パリのコレージュ・ド・フランスで「L'introduction à l'histoire du buddhisme indien」(インド仏教史入門) を出版しました。サンスクリット語とパーリ語の高度な技術を持って、ブルノーフ氏は仏教の歴史の基本的なアウトラインを再構築し、いくつもの宗派とその教義との関係を示し説明しました。一八五二年には、ブルノーフ氏は「Le Sātra du Lotus」(ル・ストラ・デュ・ロートゥス、法華経) をフランス語に翻訳しました。この翻訳は、現在でも使用されています。

一八六〇年代には、英国海軍大尉ジョン・M・ジェムズ（一八三九～一九〇八）は、海上ナビゲーション技術を教えるために来日しました。ジェムズ大尉は「日本海軍の父」と呼ばれています。東京に在住していたジェムズ氏は、当時の日本の政治家、関ヨシトモに出会い、日蓮宗仏教を知る事が出来ました。その後、ジェムズ氏は日蓮宗に改宗し、熱心な信者となりました。ジェムズ氏は明治帝国政府に雇用され、後に海軍省の顧問に昇進しました。一九〇八年彼は逝去、葬儀は身延山久遠寺法主第七八世のもと執り行われ、墓地は久遠寺の本堂の裏に立てられています。

英国では、サー・エドウィン・アーノルドが一八七九年に詩「The Light of Asia」(「アジアの光」) という釈尊伝を執筆しました。その古典は現在でも、印刷されています。

一八八一年になると、T・W・リース・ダービッツ氏がロンドンの「パーリ語テキスト協会」を設立しました。こ

の協会はパリー語大蔵経の翻訳・編集を始め現在でもその作業が続いています。この時代フランス、ドイツやロシアでも、学者は仏教経典をサンスクリット語、中国語、モンゴル語、チベット語から各国の言語に翻訳、編集、分析、解釈等が行われています。

オランダでは、H・カーン氏が「法華経」や「インド仏教必携」を含む数多くのサンスクリット語の仏教教典を一八九六年に翻訳・編集し出版しました。現在でも、仏教学部の学生はカーン氏の本を利用しています。

イタリアでは、東洋学者であったジュゼッペ・トゥッチ（一八九四―一九八四）はサンスクリット語やチベット語の経典を翻訳や彼自身の研究を公開したことにより、欧州の仏教研究会に注目すべき貢献を与えました。多作の作家で、トゥッチ氏は合計三〇〇冊の本を出版しました。トゥッチ氏は一九三五年に仏教に改宗しました。

ロシアでは、ヴァジリエフ氏、ミナイエフ氏、オルデンバーク氏やスチエルバツキー氏は科学的に仏教研究を多いに促進し百科事典ができました。一八九七年に、オルデンバーク氏は「Bibliotheca Buddhica」（仏教百科事典）シリーズを出版し現在までその百科事典は三〇巻まで出版されています。貴重な作でスチエルバツキーの「仏教の論理」も同シリーズとして発表され、一九六〇年には、ダンマバダ（法句経）のロシア語訳も出版されました。

この特定期間を観察すると、ヨーロッパ大陸の国々が大乘に特化していましたが、英国は上座部仏教を中心に傾向したことが興味深いものです。

近代に於いて西ヨーロッパ人最初仏教僧となったのはイギリス人アラン・ベネット（Allan Bennett）でありました。彼は一九〇一年にビルマで戒律を受け、法名は「アナンダ・メツテヤ」を授名をしました。三年後、ドイツ人アントン・ゲートもビルマで出家しました。米国に移住していた最初のイタリア人の僧侶は、サルヴァトーレ・チオッフィ（二八九七―一九六六）で、彼は一九二六年得度の際、「ロカンタ・セーラ」という法名を授名しました。

一九〇七年には、「英国とアイルランドの仏教会」が創立され、そして同会の受け継ぎ先は一九二四年に設立され

たクリスマス・ハンフリーズ氏の「ロンドン仏教会」でした。それ以来、同仏教会は五十年間程、英国の仏教徒の中心となっていました。

ドイツでは、作家のヘルマン・ヘッセが「シドハルター」という小説を書き、その釈尊伝を一九二二年に出版しました。それ以来、他国語に訳され、世界中でベスト・セラーとなりました。一九二四年には、ポール・ダールケ博士が「ダス・ブーデイステシユー・ハウス」と言うドイツで最初の仏教寺院を設立しました。

そしてフランスでは、アメリカ生まれのグレース・コンスタント・ルンスベリー女史（一八七六年～一九六四年）が「*La société des amis du Bouddhisme*」（仏教の友の会）を一九二九年パリに設立しました。

一九六〇年代には一九五九年のドライ・ラマと約十万人のチベット人亡命はヨーロッパの仏教界に大きく影響を与え、仏教は多くのヨーロッパ人にとって魅力的なものになりました。そして僧侶や信徒の小グループは文化的・精神的な運動を展開していきました。その後、ヨーロッパ人は欧州に於いて仏教寺院、道場や研修センターを設立するために、上座部仏教の僧侶、禅師やチベットのラマを招待しています。

当時の仏教の布教にいて、最も有名な教師は曹洞宗の佐賀県出身の弟子丸泰仙（一九一四年～一九八二年）とフェランスのベトナム禅僧ティク・ナット・ハン（Thich Nhất Hạnh、一九二六年～）でした。弟子丸泰仙師は一九六七年フランスに渡り、後に「*Association Zen Internationale*」（禅国際協会）を設立しました。ティク・ナット・ハン師はベトナム戦争時、フランスに亡命して、南フランスに Plum Village Temple を開山し、「行動する仏教」と言う運動を始めました。多作家であるティク・ナット・ハン師は二〇〇本以上の本を作文し、一九六九年に「*Eglise Bouddhique Unifiée*」（統一仏教教会）を設立しました。

欧州の仏教成長の傾向は一九七〇年～一九九〇年代に拡大を続け、禅宗、チベット仏教、上座部仏教そして日蓮正宗創価学会への改宗者が増加し、諸国に仏教寺院や研修センター等が上場に設立されました。この時期、ヨーロッパ

に多くのダルマ・マスター、教師と僧侶の誕生や成長が注目されています。

一九七五年に「European Buddhist Union」(欧州仏教連合会)はポール・アーノルド氏によりイギリスで設立され、そして一九七八年にスイスの「スイス仏教連合会」(Schweizerische Buddhistische Union / Union Suisse des Buddhistes / Unione Buddhista Svizzera)はチェコの仏教僧シルコ・フリーバ(僧侶名・ビク・クサラナンダ)により設立されました。

一九八五年には、十八の仏教寺院を含め「Unione buddhista italiana」(イタリア仏教連合会)がローマに初めて設立され、二〇一一年になると、当連合会の加盟寺院は四五ヶ寺に増加しました。一九八六年には、フランスの仏教連合会も設立され、一九九〇年後半一四〇以上のチ

現在ヨーロッパ仏教信者予想数

西ヨーロッパ :		北ヨーロッパ :	
フランス	791,419~1,002,464人	スウェーデン	36,478~91,194人
ドイツ	284,015~892,620人	ノルウェー	33,059~47,227人
イギリス	253,582~760,747人	デンマーク	11,113~27,782人
ベルギー	31,332~104,443人	フィンランド	5,266人
スイス	23,988~79,960人	ラトビア	2,178人
アイルランド	9,552人	エストニア	1,266人
オーストリア	8,222~16,444人	アイスランド	631~1,261人
南ヨーロッパ :		リヒテンシュタイン	111人
イタリア	122,965人	ルクセンブルク	不明
ポルトガル	64,796~86,394人	東ヨーロッパ :	
スペイン	47,370~200,000人	ロシア	700,000人
トルコ	35,416~48,148人	ウクライナ	44,573人
ギリシャ	10,773~15,517人	ポーランド	38,384人
キプロス	2,311~6,932人	チェコ共和国	10,163~30,489人
クロアチア	1,343人	ハンガリー	9,939人
スロベニア	1000人	ルーマニア	2,179人
マケドニア	不明	ベラルーシ	1,151人
マルタ	不明	アルメニア	309人
モンテネグロ	不明	ブルガリア	不明
		セルビア	不明

ベツト仏教寺院の完成を見ました。

一九九〇年代の後半から、欧州在住の日蓮宗ヨーロッパ人信者が誕生しました。一九九六年には、ヨーロッパでは初めてロンドンに日蓮宗寺院が平井智親上人により開山され、その後、中央ドイツにも「大聖恩寺」と言う日蓮宗寺院がシユテフェンス祥馨上人により開山された。そして二〇〇五年には日蓮宗の三つ目の寺院「蓮光寺」がイタリアに開山されました。

日蓮宗の海外布教史

前にも述べましたが日蓮宗の海外布教史は近代始まったものではありません。日蓮聖人の十三回忌の後、六老僧の一人日持上人は宗祖の大願「一天四海皆帰妙法」を達成するため、北日本布教の旅に出て、数ヶ寺を開山した後、シベリアや中国に渡りました。これは日蓮宗の海外布教の始まりでもあり、日本仏教に於いて初めての海外布教ともなりました。

近代の海外布教は、日本人の移民の歴史と深い関係を持っています。日本からの移民人数の多い順は、ブラジル、アメリカ、カナダ、そしてベルーです。日本人移民数最大の国はブラジルで一五〇万人を数え、他の日系人社会はオーストラリアや英国にもありベルーの日系コミュニティは八万人にもなっています。

近代日本人移民は一八六八年、明治維新の後に始まりました。渡米最初の日本人は、サトウキビ畑の労働者としてハワイに移住しました。海外初めての日蓮宗寺院は、ハワイの日本人移民が働き、住んでいた地域に建設されました。およそ十年後、アメリカ本土に最初の小さな日蓮宗寺院がロサンゼルス市内に設立されました。そして米国内では、サンフランシスコ、ポートランド、シアトル、ソルト・レイク・シティ、シカゴ、トロント（カナダ）にも建立されました。今日、日蓮宗のハワイ開教から一一〇年になり、ホノルルにあるハワイ日蓮宗別院はもう既に一〇〇年を迎

えました。そして二〇一五年には、ロサンゼルス寺院は、アメリカ開教一〇〇周年を迎えます。

第二次世界大戦の前に、日蓮宗の寺院はブラジル、中国、満州、台湾、東南アジアに設立されましたが、戦時中には、その寺院の多くが閉鎖されたり、或は地元の仏教のコミュニティに引き継がれました。最近ではマレーシアにて日蓮宗の檀信徒が現地で発見されました。

現在日蓮宗では、北南米大陸、ハワイ、東南アジア、南アジア、ヨーロッパに三五ヶ寺が世界中で活動していますが、日蓮宗寺院名簿には三十一の寺院しか掲載されていません。

日蓮宗「蓮光寺」が活動しているイタリアでは

イタリア仏教界や日蓮宗「蓮光寺」について語る前に、イタリアという国、そしてその文化、地理と一般的宗教構成を説明しましょう。

イタリアという国は、どんな国でしょうか？ イタリアは、ヨーロッパで五番目の人口の多い国（五九、六八五、二二七人）です。三〇一、三三八平方キロメートルの総面積の質量が、海に囲まれた半島で、ヨーロッパで第四位の経済規模を持ちます。国内は二〇の州と、その下位地方行政区域である一〇三の県に区分されています。イタリア国境にはフランス、スイス、オーストリア、スロベニアに北方を囲まれ、南ヨーロッパの国で、そのアドリア海の海岸にクロアチア、モ

現在、ハワイや北米全体で、合計19ヶ寺

ハワイ諸島	5ヶ寺
北米	14ヶ寺
・アメリカ合衆国	13ヶ寺
（カリフォルニア 3ヶ寺、オレゴン州 1ヶ寺、ワシントン州 2ヶ寺、ネヴァダ州 1ヶ寺、テキサス州 1ヶ寺、イリノイズ州 1ヶ寺、ニューヨーク 1ヶ寺、ボストン 1ヶ寺、ケンタッキー州 1ヶ寺、南カロライナ州 1ヶ寺）	
・カナダ	1ヶ寺

ンテネグロ、アルバニア、マケドニアと西洋ギリシャの一部に直面しながら、南部では、マルタ、チュニジア、リビアに近接しています。イタリア境界内二つの独立した国、バチカン市国とサンマリノ共和国があります。そしてスイス国内ティチーノ地方には一都市（カンピオーネ・ディタリア）もあります。国境付近で非常に多くの国々があるという事は、移民、言語、食べ物が何世紀にも渡って、他の国の伝統や習慣はイタリアに大きな影響を与えています。

イタリア日蓮宗唯一の寺院「蓮光寺」は北西イタリアのピエモンテ州に設立されています。古代イタリア半島には、有名なローマ文明だけでなく、様々な文明の歴史がありました。人類がイタリアに住み始めてから四万年程経っていると言われています。ローマ文明以前の古代には、原始非印欧人と印欧人の二つのタイプがありました。

古代イタリア原始非印欧人は高山族のレティ族やカムニ族、トスカーナ地方からラツィオ地方の幅広い地域に在るの古代エトルリア人、アドリア海、ヴェネト地方やコモ湖のエウガネイ族、サルデニア島のシエルデン族、シチリア島のエルミ族、シカーニ族とカラブリアのオエノトリア

国名	: イタリア共和国 Repubblica Italiana
面積	: 30万1328km ² (日本の約80%)
人口	: 59,685,227人
首都	: ローマ
元首	: ジョルジョ・ナポリターノ大統領
政体	: 共和制
民族構成	: ラテン系イタリア人
言語	: イタリア語。地方により少しずつ異なる方言があり、また、国境に近い町では2カ国語を話す。
イタリア統一	: イタリア王国 1861年3月17日 (共和制1946年6月2日)
宗教	: キリスト教 (92.9%) : その内容はカトリック (87.8%)、キリスト聖教 (3.8%)、プロテスタント教 (1.3%)
	回教 (1.9%)
	仏教 (0.3%)
	ユダヤ教 (0.1%)

族でありました。古代イタリア印欧人はイタリアック人、ケルト人、ギリシヤ人、イリュリア人やヴェネト人でありました。

ところが、近代イタリアという国の歴史は未だ浅く、国が統一したのはたった一五〇年に過ぎず、一八六一年に統一イタリア王国となりました。それ以前は、各州・地方はそれぞれ別の国であり、一部の地域はオーストリア・ハンガリー帝国に、他の地方はスペインやフランス、またアラブかローマ法王に永い間支配されるなどローマ帝国の崩壊後から、様々な国がイタリア半島を侵略した影響により、各地方の文化・建築・食べ物・習慣・社会問題・心情や考え方等が今でも異なっています。

「蓮光寺」が位置しているピエモンテ州の場合は、古代にケルト人が定住し、一時は古代ローマ共和国を脅かしましたが、その後、征服されローマ共和国の版図に入りました。後にガリア・キサルピナに属す西ローマ帝国崩壊後に、ブルゴニーユ、ゴート族（五世紀）、ビザンチン、ロンバルド（六世紀）、フランク（七七三年）によって繰り返し侵略されました。九〜十世紀には、マジヤール（ハンガリー人）やサラセン人（アラブ人）もピエモンテに侵入しました。中世から近世にかけてフランス系貴族のサヴォイア家に支配された（サヴォイア公国となった）。後にそのサヴォイア家はピエモンテにサヴォイア王国を設け最終的にはイタリアの独立運動・戦争をピエモンテから勃発させ、一八六一年三月十七日にイタリアを統一させ、全国の王家となりました。

地理的には、アルプス山脈南西部に接しており、北はヴァッレ・ダオスタ州、南はリグリア州、東はロンバルディア州、東北部はスイス南西部のフランス語圏、西はフランス南東部、南西部はモナコに隣接しています。そのため公用言語は州都のトリノを中心として、イタリア語をはじめフランス語とモナコ語（リグリア語）などであり、同時にフランス語では、ピエモン（*Piemont*、「山のおもと」と意味する）と表記されます。その他の言語はピエモンテ語、オクシタン語（フランス語系）、フランコプロヴェンサル語（フランス語系）、ヴァルサー語（古代ドイツ語系）や



ロンバルディア語です。

現代のピエモンテの文化は特産品としてワインやトリュフがあります。イタリアを代表するワインの産地として有名であり、バローロ、バルバレスコ、アステイ・スプマンテなどの銘柄を抱えています。トリュフは、黒トリュフだけではなく、ピエモンテの貴重な白トリュフは世界的に有名です。また、家畜、トウモロコシ、米、果物、栗とマロンの産地も有名で、イタリアの重要な農業生産地域です。

現在イタリアでは、キリスト教やイスラム教の信者数に続いて、仏教は三番目に多い宗教です。人口の〇、三％は仏教徒です。イタリアの仏教界に大乘仏教、小乗仏教、金剛乗仏教や仏教系の新興宗教の四つの部門に分割することができます。

イタリアの仏教界 一二二、九六五人（人口の〇・三％）

大乘仏教

禅宗（曹洞宗・臨済宗）、韓国系禅宗、中国仏教（禅宗・浄土）、台湾禅宗、天台系、日蓮

仏教等、真言宗

小乗仏教

（スリランカ系）

金剛乗仏教

（Vajrayāna、チベット仏教）

インターブディスター（Interbuddhista、諸宗派混雑寺院）

新興宗教

（創価学会、立正交成会、真如苑、真光教団、霊気等）

大乘仏教では、チベット仏教、禅宗（曹洞宗・臨済宗）、韓国系禅宗、ベトナム禅宗、真言宗、日蓮系仏教等の数多くの宗派やアジアの伝統がイタリアに存在しています。

チベット仏教の場合は、当然大乘仏教ですが、ヨーロッパの分類方法に応じればチベット仏教は大乘仏教だけではなく「金剛乗仏教」(Vajrayana)と訳ける場合もあります。チベット仏教の宗派は主に四つの宗派のNyingma(ニャム派)、Kagyü(カギュ派)、Sakya(サキャ派)、Gelug(ゲルク派、ダライ・ラマの宗派)があり、イタリアには、この四つの宗派の二十八ヶ寺が全国で活動しています。チベット仏教の信徒は、チベット難民の少数でありませんが、殆どの信者はイタリア人です。チベット仏教は現在のイタリアでは、禅宗のようにもともと古く、現在、イタリア伝統的仏教界をリードしているのが主にチベット仏教や禅宗です。

禅宗や禅系諸宗派は、チベット仏教のように多く、一番古く(戦前)からイタリアの仏教界をリードしてきました。イタリアの一般の人は、仏教と言えはすぐ「禅」のイメージを想起します。イタリアにある禅宗や禅系の諸宗派は日本の禅宗、曹洞宗や臨済宗であり、そしてアメリカ系禅宗、ベトナム禅宗、韓国禅宗、また中国や台湾禅宗です。

現在、イタリア仏教連合会に登録している禅宗寺院は二十ヶ寺ありますが、もともと活動していると思います。また、ベトナム禅僧テイク・ナット・ハン系の集団・道場、アメリカ系禅宗寺院・道場が全国に数多く、そして韓国のソング(「禅」のハンゲル読み)宗の一ヶ寺あります。

上座部のテーラヴァーダ宗は現在イタリアに於いて全てスリランカ系の寺院であり、七つ程の寺院があります。この寺院の殆どの信者はスリランカ人の移民です。スリランカのテーラヴァーダ寺院は現在、主に民族寺院となり、イタリア人の信者はほんの僅かです。しかし、イタリアのアドリア海に近い一ヶ寺だけはイタリア人・欧州人を中心に教化しています。

中国系仏教の中国寺院は現在三ヶ寺があり、一つは五千〜七千人のイタリア在住の中国人のために最近建立された台湾系禅宗の寺院「華義寺」があります。「華義寺」が建立される前に開山したのが「普陀山」というローマ市内にある寺院とフィレンツェ近くのプラート市の「普花寺」です。この寺院は全て中国人のための民族寺院であり、イタ

リア人の仏教界と振れ合う機会はまだ少ないようです。この三ヶ寺はイタリア仏教連合会に登録していないようです。イタリアには、伝統的な天台宗寺院は存在していませんが、天台系修験道の寺院一ヶ寺がヴェネト地方に存在しています。

現在イタリア仏教界で信者数の少ない宗派は、天台山門派（比叡山延暦寺）及び寺門派（園城寺）や中国の天台宗、黄檗宗、日本の浄土系・真宗と奈良仏教の諸宗派です。

日本の新興宗教もいくつかがイタリアに入っています。例えば、創価学会、立正佼成会、真如苑、真光教団や靈気等があります。創価学会や靈気は全国的に信者数も増えています。

最後になりますが、日蓮宗や日蓮系仏教の諸宗派、在家団体や新興宗教も全国的にあります。イタリア仏教界の信者数一二二、九六五人の半数は日蓮・法華経系の信者です。檀信徒数の順に、創価学会（SGI）、日蓮宗、日蓮正宗、本門仏立宗、立正佼成会、単立グループ（宗派・寺院・信徒団体に無所属）や顕本法華宗の宗派、在家団体や無所属信者になります。

イタリアに於ける日蓮系仏教界

（イタリア仏教界信者数の五〇％）

創価学会（全国に一八会館）

日蓮宗

日蓮正宗

本門仏立宗

立正佼成会

顕本法華宗

単立グループ

創価学会（SGI）という宗教団体は、日蓮系の仏教団体の中では古くからイタリアに存在しています。この宗教団体は何回も名前を変更していますが、現在は「Istituto Buddhista Italiano Soka Gakkai (IBISG)」(イタリア創価学会仏教協会)と名付けています。

七〇年代〜現在迄のイタリア創価学会の名称

INS (Nichiren Shoshu Italiana) : 日蓮正宗イタリア (一九七〇年)

Associazione Italiana Nichiren Shoshu (AINS) : 日蓮正宗イタリア連合会 (一九八七年)

Associazione Italiana Soka Gakkai : 創価学会イタリア連合会 (一九九〇年)

Istituto Buddhista Italiano Soka Gakkai (IBISG) : イタリア創価学会仏教協会 (一九九八年)

以前この宗教団体は、日蓮正宗の檀信徒団体でありましたが、長い間、同宗派と紛争をし日蓮正宗から破門されました。以前の創価学会の教義と宗教的習慣は日蓮正宗の法門や伝統を守っていましたが、破門されてから、その教義が変化し続けてきました。

当団体のイタリア総本部はフィレンツェにあり、第二・第三本部はローマやミラノにあります。創価学会のヨーロッパ総本部は以前パリにありましたが、フランス政府は「創価学会はカルト団体である」と宣伝したためその本部はイタリアに移りました。南フランスの創価学会ヨーロッパの総本山であった研修道場を閉鎖しミラノ市外にあるコルシコ市に二万平方メートルの新しい会館を建設中で、最初に出来るのが六千平方メートルで千人収容できる建築

物です。創価学会の様々な批判にも拘わらずこの組織は非常にダイナミックで、常に成長している事と同時に、脱会者も毎年非常に多い。そのため、全体の転身数はむしろ、多いでしょう。

この三つの本部を含めて、全国に創価学会の集会所は十八会館ですが、その会館の使用は特別な集いの為に使用され、一般的に毎日の活動は信者の家を利用しています。その会館は文字通り、全国すべての主要都市や地域に位置しています。

創価学会イタリア国内全18会館

北 部…ミラノ、ゲノヴァ市、ブレシヤ市、ターラント市、ヴィチエンザ市、トリノ
中央部…ボロニヤ市、チエーチナ市、フィレンツェ、アンコーナ市、グロッセト市、リヴォールノ市、ローマ
南 部…バーリ市、カタニア市、カリアリ市、パレルモ市、サルレルノ市

先程、創価学会は成長しながら脱会者も多く、組織全体の転身は大きいと説明しましたが、その理由はいくつかあります。最初は、教義的に見てみましょう。仏教は本来、三宝を尊ぶ宗教であり、どんな宗派も当然仏教の三宝を礼拝しています。その三宝は、仏宝、法宝、僧宝の三宝ですが、宗派によってその考えや捉え方が異なります。従って、各宗派の三宝観を見れば、その宗派の本質や価値観を見ることができるよう。では、日蓮宗、日蓮正宗や創価学会の三宝に対するそれぞれの捉え方を簡単に調べてみましょう。

日蓮宗の三宝は…

仏宝…久遠の釈迦牟尼仏

法宝…妙法蓮華經

僧宝…日蓮聖人

日蓮正宗の三宝は…

仏宝…日蓮聖人（末法の御本仏）

法宝…南無妙法蓮華經の大御本尊（大石寺の板曼荼羅）

僧宝…日興上人

創価学会の三宝の場合は、二つの捉え方がある。

(1) 創価学会は、元々に日蓮正宗の信徒団体でしたので、書面では日蓮正宗と同じです。

仏宝…日蓮聖人（末法の御本仏）

法宝…南無妙法蓮華經の大御本尊（板曼荼羅）

僧宝…日興上人

(2) しかし、信仰上では、実際の創価学会の捉え方が上記の三宝と異なりますが、創価学会の本音の姿は下記の通りです。

仏宝…会長池田大作

法宝…会長の書、スピーチなどに顕す会長の仏教観・解釈

僧宝…創価学会の組織

この団体は、日蓮聖人の教えを大きく誤ってとらえています。それに気がついて、疑問を持つようになる人は学会の中で少なくないようです。疑問を問うようになれば、それが学会幹部との摩擦の原因になる場合が多いので、後

に、そういう人は脱会することとなります。創価学会を脱会した多くの方は日蓮宗、日蓮正宗、他宗派などに興味を持ちお寺に参拝に来ます。中には仏教の信仰を完全に辞める人も少なくないようです。

右記の三宝の例を見ると、創価学会は「仏教協会」と言っていますが、実際問題、学会の会館または信者のご自宅にしても、お釈迦様の存在は一切ありません。当団体は「本物の日蓮仏教」の宗教団体である事を宣伝していますが、何処へ行っても、日蓮聖人のお姿でさえ存在していません。その代わりに各会館や多くの信者の自宅で、会長の写真は必ず飾ってあります。佛様もなく、日蓮聖人もない宗教団体に対して、不満な気持ちを発生する信者は珍しくありません。その様な人が日蓮宗と関わり、まず三宝から見ることが多いようです。もう一つの多い理由は、会長に対する過度の不信感などがあります。その他の理由もありますが、それだけで論文になる程、書く事が多いので此の辺に致します。

日蓮宗に魅力を感じる脱会者は、我が宗門の仏教らしさです。三宝にしても、合掌姿にしても、他宗との全体的和合、また仏教の教え修行と勉強を深く認識しているようです。

私は十三年前に、日本を離れ、まずロンドンの寺院の主任となりました。毎月イタリアにも出掛け、全国を回りながら布教してきました。最初は、お寺など何もないため、三人でローマの郊外にある海辺に行って、海に沈む夕日に向って、お経、お題目を唱えました。二年後の二〇〇三年四月二十八日に、小さなお堂をローマで開き、そこから布教を始めました。大勢の信者が来ることを期待していましたが早期の頃は数人しか信者さんがいなく、いつか大きなお寺を開き、イタリアで日蓮宗の教えを全国へ広めようと皆で語り、日蓮聖人の夢の「一天四海皆帰妙法」を達成するように一緒に頑張ろうと誓いました。ローマの小さなお堂は後年に閉鎖し、北イタリアのミラノ市外に一時的に移し、「蓮光寺」を二〇〇五年に建立しました。その後最終的にもっと広い所に移転しようとのことで、現在のピモンテ州東部のチェレゼート市に建っています。

長年、私にとって大きなインスピレーションや励ましになっている日蓮大聖人の御遺文の中に二つの文書があります。その文を若い時からずっと読み続けています。一つは「諸法実相抄」からの一節です。

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へつたふるなり。未来も又しかるべし。是あに地涌の義に非ずや。剩へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし。ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給ふべし。

イタリア人の信者は、各地域にいますが、大多数の信者は大都市にいます。主なサンガはトリノ、ミラノ、ジェノヴァ、フィレンツェ、アドリア海、ローマ、ナポリ、南イタリア等、全国的に点在しています。右記の「諸法実相抄」の一節のように、ここ数年、信者は各地に少しずつ毎年増加してはならず、イタリア国外でも、フランス、スペイン、ポルトガル、スイス、ポーランド、ギリシャ、トルコやアフリカ等にも少しずつ新しい信者が誕生し、毎年増えています。その信者数の約九〇％は元創価学会の脱会者や元日蓮正宗の信者です。この状況は現在、海外にある日蓮宗寺院や組織も殆ど同様です。多くの元学会員はSGI内で本物の仏教信仰、研究・学習や修行をする事が出来ない場所であると実感し、脱会を決心するようです。そして、折角、法華經や日蓮聖人の教えに巡り会ったのにもかかわらず、その信仰を続けて行く事が出来るだろうと悩み、大勢の方々が今、日蓮宗にその助けを求めようとしています。

これらの人々（特に元学会員）に対し日蓮宗への入信を許すには、あまりにも仏教徒としての教育や価値観が異なっています。まして、脱会者は、仏教の教えを知らず、法華經の信者だと言ってみても、法華經を読んだ事がない人が殆どです。脱会者を卒業させ、本物の仏教徒にするには、我々開教師の大きな責務ではないでしょうか。

「蓮光寺」では毎月イタリア、フランス、スペイン等で法要、法華経や御遺文の勉強会、研修会、作務行、日曜礼拝などの活動を当山、各地域やインターネット（スカイプ通信を通して）で開催しています。また、その研修教材等を配り、活動や行事を促進する為、いくつかの方法を利用しています。例えば、電話連絡と相談、携帯電話からのテキスト・メッセージ、インターネットのホームページやインターネットでソーシャルネットワークワーキングを通して、法華経や日蓮聖人の御遺文、仏教の基本知識や価値観、お寺の法要、行事と活動スケジュール、法話、翻訳されたものなどをイタリア語、フランス語、スペイン語、英語等で配信し、教材を各国の言語で翻訳し、イタリアで出版するよう作業をしています。

大きな問題点は、現在の日蓮宗では、日本語や英語の教材は豊富にあります。ヨーロッパ人の殆んど（英国、アイルランドや北欧以外）は英語がよく分かりません。日蓮宗の出版物を読む事が困難を極めています。そのため、「蓮光寺」では日蓮宗修行要典を各国の言語に訳し出版しています。また、欧州の言語版法華経は、フランス語以外、全てが創価学会から出版されているサンスクリットからの直訳のものしか有りません。その為、蓮光寺では、まずイタリア語版の法華経（三部経）を翻訳している最中です。日蓮聖人の御遺文もイタリア語、フランス語、スペイン語、ギリシャ語、トルコ語等に毎月、原文から翻訳作業をしています。

歴史に於いて、ヨーロッパは仏教と多少触れ合う事があり、いくつかのものが仏教からヨーロッパの宗教や生活に影響された事があるにも係わらず、欧州は非仏教国であり、キリスト教に深い関係のある地域であります。現在、ヨーロッパのメンタリティーは少しずつ変わってきて、仏教に対して大分関心を持つようになっていますが、ヨーロッパには日本人の移民地が殆んどないため、こちらの日蓮宗寺院は民族寺院にはなりません。日蓮宗が完全に各国に根を据えるには、長い時間や動力が必要でしょう。そのため、当山のヨーロッパ信者には、日蓮聖人の御慈悲や勇氣、決してあきらめない精神を全員に教え、その精神をこの「寂日房御書²」の一節を通して教えていければと考えており

ます。

かかる者の弟子檀那とならん人人は宿縁ふかしと思て、日蓮と同じく法華経を弘むべきなり。

註

(1) 『昭和定本日蓮聖人遺文』七二六頁

(2) 『昭和定本日蓮聖人遺文』一六七〇頁